

2023年4月2日 棕櫚の主日(受難節第6主日)礼拝

メッセージ「痛みの行く末」

岡嶋千宙伝道師

聖書 イザヤ書 50章4-9節

前回こちらでメッセージを担当したのが3月12日でした。今日は4月2日。あっという間の4月です。3月末から4月の始め、日本では年度の変わり目で、春休みの時期です。我が家でも、春休み全力満喫中の子どもが、普段は学校に行っている時間帯を含めて、昼夜を問わずに家にいます。わたしが仕事をしているときに、声をかけてくることもしばしば。余裕があればいいのですが、集中しているときは、「なんでこんなときにっ!」とイラッとして、誰の声も届かない静かな環境があればいいのに、と思ったりもします。でも、仕事が一段落して、リラックスしていると、ふと思うのです。さっきは呼び掛けられるのが嫌だったけど、声をかけられて仕事はかどらなかつたかという、案外そうではなかつたな、と。むしろ逆で、中断されたからこそ、かどるということが結構あります。呼び掛けられて、張り詰めていた思考が緩められるのでしょうか。子どもと会話のキャッチボールをしてから仕事に戻ると、新しい考えが生まれたり、ヒントとなる言葉、思い付きそうで思い出せなかつた言葉が浮かんできたりすることもあります。呼び掛けによって助けられる。苦しみの只中にいたときもそうでした。ここで詳しくはお伝えできませんが、心にも身体にも傷を負って、生きる希望も見いだせなくなっていたとき、その苦しみから抜け出すことができたのは、声をかけて、呼び掛けてくれる人がいたからでした。わたしの声に、呼び掛けの言葉に、応えてくれる人がいたからでした。わたしの呼び掛けと、他の人たちの呼び掛けの音が響きあって、苦しみの中をなんとか生き抜くことができたのです。日常だけではなく、苦しみのなかにも響きあう呼び掛けの声。本日与えられたイザヤ書のなかにも、響いています。その響きを、今ひととき、みなさんと共に味わってみたいと思います。

苦しみのなかにいる人、痛みを覚えている人。みなさんなら、その人に、どう声をかけるでしょう。どんな言葉を紡ぐでしょう。わたしは、かける言葉が見当たらずに立ち尽くします。それでも、なんとか励ましたい、痛みを和らげるような、苦しみを軽くさせるような言葉がかけられたら良いのにと願い、言葉を探します。そして、いくつか発してみるものの、相手に届かずに、その言葉たちが空中に浮いたまま。そんな経験を何度もしてきました。本日の御言葉も、苦しみの中で痛みを覚えている人たちに向けられたものです。4節「疲れた者を言葉で励ます」では、その人たち、苦しみの中で痛みを覚え、「疲れている」人たちを励ますために、どんな言葉が語られているのかというと、とてもシンプル。「苦しみに耐えよ。いや、むしろより多くの苦しみを自ら求めよ」。このメッセージ、キリスト教では、割とよく耳にするものではないでしょうか。新約に収められた福音書、あるいは、イエスの死後に書かれた手

紙などに記されている言葉にも見いだせます。例えば、マタイ・ルカ福音書に残されているイエスの言葉。「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(マタイ 5:39、ルカ 6:29)。本日の 6 節と同じニュアンスです。また、ローマの信徒への手紙 5 章 3-4 節には、「わたしたちは苦難をも誇りとしています。苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を、品格が希望を生むことを知っています」とあって、今日の箇所を、教訓として言い直したものとも言えるでしょう。「苦難に耐えなさい。むしろ、苦難を喜びなさい。それこそが、信仰者としての正しき姿です」。そんなキリスト教のメッセージが響いてきそうです。このメッセージに慰めを感じることもあるでしょう。ですが、わたしは、素直に受け止めることができません。信仰が足りないからなのかもしれないのですが、怖さを覚えるのです。何より、自分が苦しんでいるときに、この言葉を向けられたら絶対に嫌。「そんな言葉、聴きたくない!」と、その言葉を発する人から距離を取りたくなります。誰かに向ける言葉としても使いたくはありません。この言葉を向けることによって、苦しみの中にある人をより一層苦しめることになる恐れがあるからです。たとえば、DV 被害にあって苦しんでいる人。彼女たち、彼らは、DV 自体の被害だけではなく、ようやくの思いで相談しにいった先で言われる言葉を受けて、さらなる苦しみを受けることがあると言われています。「相手だって悪いことばかりをしているわけではない。あなたも苦しいかもしれないけれど、相手の方も苦しんでいるはず。お互い様だから、辛抱して、耐えて、赦しあって、お互いにとって良い結果が生まれることを信じて、神様がその道を整えてくれることを信じて歩みましょう」。そう言われて、言われた通りに関係を続けた結果、更なる苦しみ、痛み、傷を受ける。そして、次第に、「苦しむのは当然、その苦しみの原因は自分」と思うようになり、苦しみの思い、痛みの思いを誰にも言えなくなる。傷ついていても、その痛みをどこかに吐き出すことができず、しまいには、自分の、あるいは、相手の命を絶ってしまうこともある。

もう一度、本日の御言葉に目を向けます。4-7 節まで。なにか違和感を感じないでしょうか。わたしは感じるのですが、奥歯にものが挟まった感じというか。どこかすっきりしない。その要因のひとつは、5 節の前半までと、後半以降の言葉に微妙なニュアンスの違いがあることです。語りのトーン、あるいは声質、醸し出している空気、というべきでしょうか。5 節前半までは、語り手である「わたし」が、神に絶対的な信頼を寄せて、身体の隅々にまでその信頼をあふれさせ、自信を持って揺るぎない言葉を発しています。ですが、5 節後半以降はその自信に陰りが見えるのです。神を信頼していることは間違いないのですが、どこか揺らいている。無理がある。表面上は絶対的信頼を装っているけれど、実は、内面では、その信頼がほころんでいて、それを見せたくなくて、知られたくなくて、信頼の言葉を無理に発している。強がっている。一生懸命に作り出している。おそらく、この言葉の背後には、当時の人たち、とくに、社会で周縁に追いやられ、弱く貧しくされていた人たちの

存在があったのでしょう。少しだけ、当時の状況を振り返ります。時代は、紀元前 6 世紀。イスラエル民族の歴史のなかで、バビロン捕囚と呼ばれるときでした。400 年以上続いた王国が完全に滅ぼされ、人々は、神によって与えられた土地から引き離され、異国の地に強制移住させられていました。その多くは、イスラエル社会の中でも、比較的地位が高く、経済的に恵まれる人たちでしたが、なかには、日々の生活すらままならない人たちもいました。地位が高く豊かな人たちでさえ、捕囚先では苦しみの生活を強いられていたのですから、貧しい人たちにとっては、より一層に厳しい状況であったことは想像に難くありません。国が滅びる前から、社会の中で見捨てられていた人たちは、捕囚先で、その国バビロニアの人々からも、同胞のイスラエルの人々からも、嫌われ、差別的な扱いを受け続けていました。様々に張り巡らされる抑圧と差別の網に縛られ、二重、三重の苦しみを負っていたのです。本日の御言葉は「逆らわない。退かない」と語っていますが、その人たちは、逆らったことも、退いたこともあったのでしょう。打たれたとき、痛みを負ったときに、逃げ出すこともあったのでしょう。社会の多くの人たちから注がれる軽蔑のまなざしを受けて、辱しめを受けて、顔を隠すことだって。それすらできない状況に追い込まれていたのかもしれない。逆らいたくても逆らえない。退きたくても退けない。頬も背も差し出したいくはないけれど、差し出さざるを得ない。そうしなければ生きていけない。逃げたいけれども、留まらなければ、生きていけない。自分を、自分の愛する者を、守るためには、逆らわず、退かず、自分の身体を差し出して、苦しみに耐え、痛みをこの身に引き受けざるを得ない。痛みを声を出しそうになっても、グツと押し込めて、耐えてやり過ごす。それしか命を繋ぎ止めるすべがない。辱しめも、恥も、唾も、生きるために、すべて引き受けて、その姿が公の裁きの場で「罪人」と断罪されたとしても、異論を唱えることなく、逆らうことなく、その姿、罪人として、生き抜く。9 節の後半の言葉には、聴き手に対する警告の意味合いが込められています。その言葉が警告としてインパクトを持つということは、当時、実際にそういう状況にある人たちがいたということです。「衣のように擦り切れ、虫が食い尽くす」。それは、痛みを抱えながら、苦しみのなかを生きていかざるを得ない、弱く貧しくされた人たちの現実の姿でした。その姿を、本日の御言葉の語り手が知っていたのは、単に当時の状況を傍観者として見ていたからではありません。その人自身が、弱く貧しくされた人だったからです。イザヤ書の別の箇所でも、本日の語り手の様子が記されています。52 章 14 節「その姿は損なわれ、人のようではなく、姿形は人の子らとは違っていた。」53 章 3 節「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、痛みの人で、病を知っていた。人々から顔を背けられるほど軽蔑され」ていた。

その人物が、「疲れた者を言葉で励ます」。神はその人が、励ましの言葉を語る事ができるように、彼を「呼び覚まし、耳を呼び覚ま」します。最初の「呼び覚ます」は目を開くこと。次の「呼び覚ます」は耳を開くこと。その開かれた目と耳が向

く先は、「疲れた人」。つまり、社会の中で、もっとも弱くされ貧しくされた人たちです。苦しみのなかにあり、傷を負い、痛みを覚え、逃げられずにいる人たちの姿、そして、声と言葉。その姿、その声に触れた本日の語り手は、言葉を紡ぎます。「我々は共に立とう」(8 節)。それまでは、「私」としか語ってこなかったその人が、自分と同じ境遇で、苦しみの中に歩んでいる他者の存在に触れたとき、「わたしたち」と語り始めました。そして、さらに力強く言葉を重ねます。「主なる神が助けをくださる。その方が近くにいる」(8-9 節)。神の救いは、持てる人、余裕のある人、強さに満ち溢れた人たちの側からもたらされるものではありません。弱く貧しくされた人たちの側からこそ、救いの道が開かれるのです。苦しみのなかにあり、痛みを負っている人たちの近くにいる神。そして、その人たちの声、姿、命の輝きが満ちる場所から開かれていく神の救い。その人たちの痛み、苦しみが、その人自身の声として言葉となって発せられ、その言葉が響いたところに、神の救いが広がっていく。

人となった神の子イエス。彼が負った痛み、担った十字架の重み。イエスは、この世を生きる中で、人々の痛みや苦しみの声に敏感であり続けました。特に、当時の社会で、小さくされていた人たちの声に耳を傾け続けました。女性、子ども、病を負った人、嫌われた職を担っている人、罪を犯したとされる人、外国の人、障害を持っている人。その人たちのそばに赴き、その人たちに見つめられ、まなざしを向けられ、語りかけられ、その人たちの声を聴き、その声に乗せられた言葉にこたえ、共に歩み続けたイエス。その歩みの結果として、イエス自身が痛みを負い、傷を負い、そして、十字架にかけられ死を迎えることになったのでした。その歩みをなしている間、イエスが発した声。どこに響いたのでしょう。誰に聞き受け入れられたのでしょうか。苦しみの道を歩み、人々の痛みを背負い、誰にも理解されることなく、最も親しい人たちからも見離され死んでいったイエスの声と言葉。それは、今、わたしたちの間で響いています。繰り返される紛争の影響により、生活空間を、愛する者を失い、自分の命も危うい状況にある人たち。迫害や差別を受けていた祖国を離れ、別の国に逃れてきたけれど、その国の人たちに受け入れられずに身を隠すように生活をしている人たち。日雇い労働に従事する人たち。部落出身の人たち。社会の当然とは異なる生き方をしている／せざるを得ない人たち。イエスの痛みの声は、その人たちの発する声としてこの社会、この世界に響いています。その声、その声に乗せられている言葉を、ないものにしない。その声に耳を傾け、その言葉を受け止め続けていく。その声と言葉に、一人ひとりの声と言葉、そして思いを乗せて、社会の中で響かせ続けていく。その先に開かれる神の救いを一つ一つ感じ取っていく。これからの一週間、みなさまと共に、その歩みをなしていきたいと願います。